

当日、欠席された構成員の御意見

・ 令和3年度の公開実践の成果と課題について

この度の公開実践については、公立・私立、幼稚園・保育園・認定こども園等がそれぞれ行っている保育実践に対する垣根が低くなる契機になったということに大変意義があった。

各園が、遊びを中心とした「子ども主体の保育」を実践しているが、子どもが主体的に活動するための環境構成や援助等、他園の実践を知らないまま取り組んでいるのが現状である。これでは、広島市全体の幼児教育・保育の質向上につながらない。運営主体や施設種別を問わず、相互理解・交流等を行うこの度のような取組が、広島市全体の幼児教育・保育の質向上につながっていくと考える。

広島市の保育施設では、「往還型研修」を取り入れている。「遊びを通した学びの充実」について、園外研修や公開保育の場で環境構成や援助の工夫などを学び、学んだことを園で語り合う中で、様々な考え方や視点があるということに気づき、情報共有した上で、実践・省察し、改めて実践するという過程を繰り返すことで、保育力の向上を図っている。公開実践を通して、「往還型研修」につながることは、幼児教育・保育の質向上を図る上で非常に重要だと考える。

今年度は、初年度ということで限られた人数で実施されたが、広島市全体の幼児教育・保育の質向上を目的とするのであれば、今後はより多くの園が参加できることが望ましい。実施園のキャパシティーに課題があるのであれば、年間を通じて、複数園で公開実践が実施されるよう配慮いただければありがたい。

・ 「幼児教育推進体制の充実・活用強化事業」の区切りとして、当懇談会にこれまで参加されての御意見や御感想、今後の乳幼児教育保育支援センターの事業展開に向けての要望等について

幼児教育は、「就学前の子どもに関わる全ての教育」を指したり、「0～2歳児を対象とした乳児保育を除いた就学前の教育」などといった考え方があったりするが、幼児教育のスタートは0歳からであることを改めて確認する必要がある。

昨今、どの幼児教育・保育施設でも「子ども主体の保育」が謳われている。子ども主体の保育とは、それぞれが好きなことをやればいいという意味ではなく、自分でやりたいことを見つけ、時には友だちと協力しながら粘り強く挑戦していく姿勢を育てていこうというものである。その前提となるのは、0歳からの丁寧な応答的保育の実践と子ども理解である。

子どもは、生後6か月頃から養育者（特定の保育者含む。）を特別な存在と認識するようになり、養育者に対してアタッチメント行動（しがみつく、抱きついていく、後追いするなど）を向けるようになる。その時に丁寧に応答することで、子どもの安心感につながり、自分は愛されているという自己肯定感につながっていく。それが様々なことに挑戦しようという意欲につながり、主体性が育まれていく。

0歳の時に丁寧に応答的な保育をするか否かによって、その後の学びの姿勢や様々なことに挑戦しようという意欲に影響を及ぼしてくると考える。

本懇談会では、0歳の時の関わりによって子どものその後の人生、10年後、20年後を左右するというのを再認識するとともに、「子ども主体」をベースにした幼児教育・保育の質向上について検討してほしいと思う。